

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.59 2012.2..15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で63年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

## 悲恋 笠置シズ子の因縁

吉田定一

結婚すれば男を食い殺すといわれる五黄の寅年。まさかそれを気にしてではなからうが、笠置シズ子は二十九の年まで恋らしい恋の経験がなかった。ふだんも舞台と同じくパアパアして、おいそれと中途半端な惚れ方の出来ない性格だから、「恋愛？ ひやかさんというや」という調子だった。

ところが昭和十八年の夏、名古屋の大須太陽館に出ていた彼女が、新国劇公演中の御園座へ、同じ関西出の辰巳柳太郎を訪ねて行った時、ふと廊下を歩く長身の美青年を見た途端、どきんとした。しかし、その時はべつに気にとめず、ただうまく着こなしたグレイの背広に眼に残る程度であつたが、翌日また同じ廊下で出会つてみると、彼女の胸に波立つものがあつた。少女時代、林長二郎(長谷川一夫)にあこがれた初恋以来、ついにぞ覚えぬときめきである。あ

とで思えばその一瞬が彼女の人生を決定したようなものだ。

吉本興業の人に紹介されたそのノッポのまだ学生くさい男は、吉本興業のぼんぼんで、たつた一人の跡取り息子だった。彼はうぶらしい口ぶりで、「あなたのファンです。」といった。そして、あくる朝早く、神戸の相生座の初日に間に合



うように名古屋駅へ行くと、意外にも彼が同じ汽車を待っていた。

三度目の出会い。彼女はふと動揺した。

大正三年生まれの彼女は、笠置の前には三笠シズ子を名乗っていたほど「三」の数字に迷信的であつたから、舞台衣装のつまった重いトランクを持ってくれる彼の横に座り

ながら―このまま一生並んで旅をする男かも知れぬ―そんな予感にそわそわしていた。

しかもその上、明日の舞台が相生座ということも古風な彼女好みの因縁だと嬉しかった。それは彼女の生まれたのが香川県の相生村というばかりでなく、四才のとき、医者も見放す百日咳の大病を通りがかりの遍路姿の老婆がくれたお札のおかげで奇跡的に助かったが、そのお札の裏に相生村しず子と書いてあつたところから、それまでのミツエを静子と改名したほど、相生はいわば彼女のラッキー・ネームだった。

だから、ゴトゴト鳴る車輪の音にかくれて相生、相生と呟くうちに彼女は、彼吉本エイスケが関西興行界名門の御曹子であること、自分が身分違いの一介の歌手であること、それに相手が九つも年下の学生であるとも充分知りながら、もはや心のぐつと傾いて行くのをどうしようもなかった。

(後略)

※その後、二人の仲は深まり子供までできたが結婚はならず、胸を病んだエイスケはシズ子の出産前に死す。私生児だつたシズ子は、自分と同じ運命の子にわつと泣ききずれた。



月日

ご覧の通りの内容豊富な秋の大祭号が出来上がった。編集部一同、皆様に喜んでいただきたい一心から連日連夜の大活躍。それが原因でもあるまいが、人気者の青山うたが倒れた。本誌でおなじみのよろづ相談所の長尾博士から向う三ヶ月の休養を宣告されたのだ。

「そういうえば大分やせて、キレイになったなア。嬉しいでしょう？」

「温泉へ行きなさいよ。でも女の一人旅は危険だから僕と一緒にこうね」

と例によって口さがない吉岡武雄や上田嘉俊が毒舌をふるつていると、

「温泉なら僕が案内してやるよ」とイトも優しい声がかかった。

「マアうるさい。病氣ぐらい一人でいたいわ。男の人って、いやらしい！」

と、柳眉ならぬ筆眉をさか立ててヒスをおこした女史、皆がドツと笑つたので、ヘンだなと振返つた鼻先にニコニコ笑っているのは、何と東井社長！

「アラ、マア、先生！……アノ、もう、病氣、結構ですわ」

## 説き流しのお歌（『真実の道より』）

明治十七年夏、京都の市民は猖獗（きやうけつ）を極めたコレラにおびえていた。深谷氏は、そうした市民の一人を連れて、真夜中に京都を立ち、日盛りをようやくおちばに着いた。連れられて来た人は、もどく「お詣り（まい）しておけば損はあるまい」というほどの、あてのない参拝だった。

真夏の午下（ひる）がり、三島の村のあたりに人は人影もみえず、お屋敷も灼けるような日の下にひっそりしていた。御休息所にくくと、教祖様は上段の間で、横になって居られた。その人は講元である深谷氏と二人で下座にひかえていると、取次の先生が、「京都からこれくくの二人が見えました」と教祖様に伝える。二人が改めて頭を下げたとき、教祖様は身体を起され、

「まゝ食べるのも月日やで もの云うのも月日やで これわからんが ざんねんく」

そう仰ったきり、また横になって息まされた。それは美しい声であった。聞きなれぬ節回しもついていた。

講元は有難そうに頭を下げていたが、その人は何のことかわからなかった。歌を聞かして貰ったのか、それとも馬鹿にされたのか。その中でも、馬鹿にされたという思いがはっきりとして来ると、わざく京都から歩いて来たのが、案の定、無駄骨折で、うわき通り「狐つき」だろうと独りうなずいた。

帰り道は講元とは余り話もしなかったし、腹立ちまぎれで足は早かった。

「まゝ食べるのも月日やで、もの云うのも月日やで」ただそれだけの言葉を幾度も幾度も口の中で繰り返してみたが、得心が出来なかった。（自分でこうして歩き、自分で食い、自分で喋っているのに……馬鹿なことを云うな）と舌鼓をうって、「狐使いめが、何をいうー」とつぶやかずには居れなかった。それから間もなく、その人はコレラになった。

隔離があまり厳しいので、その女房は



（医者に診せるのは、殺されるようなものだ）と思い、（どうせ駄目なら最後まで自分の手で……）もしかして救かるかも知れない……と必死になって看病した。

が、夫は寝返りもせず、ものも言えず、死人も同様だった。

その人も（もう俺はあかん）と思った。しかし水が飲みたかった。飲んでも吐いてしまうことは知っていても、灼けつくような喉の乾きを辛抱しきれない。女房が細かい漿筆で唇をぬらしてくれる位では足らなかった。大きなコップで一杯ガブ

ガブのみ干したかった。心で眼で「水をくれ！」と叫んでも、「俺がこんなに言ってるのに何故わからないのか」と叫んでも舌はこわばり頬の肉はひきつり、それが言葉にならなかった。

その無念、残念、苦悶の中で、フト思い浮んで来ることがあった。

まゝ食べるのも月日やで……

自分が食い自分が喋るのだと断言していた。が、それはまちがいだ。自分の力より外に、もっと大きな絶対なる力が働きかけている、らしい、そうに違いない。こう思うと、これほどの真理を説かれる尊いお方を（狐使い）などと罵ったことが申し訳なくて、お詫びの心が激しく動いた。すると頭に胸にはりこめていたもやが晴れ、所詮全部とはいえないが、ともかくお言葉の意味がはつきりと悟れた。その瞬間、喉に力が入り、舌が動き、頬がゆるんで、「水！」と一声叫んだ。

死んだと思っていた女房は、あわてて水差しを病人の口に含ませた。もう夢中であつた。ガブくと火のような喉に注ぎこんだ。勿論すぐ猛烈な吐瀉（としゃ）を起したが、幾分かの水が腹に治まったらしく、それがきつかけとなつて、瀕死のコレラからあざやかすぎるほどに全快してしまつた。

神様は因縁あつてこのやしきにお引き寄せなさるのであるから、訳がわからず帰って行った者にも、こうしてはつきりしたしるしをお見せ下されたのである。

みちのとも 昭和九年三月五日

4月18日発行

# 自分が変われば 全てが変わる

中臺勤治 著 頁数・価格未定

読むほどに 心が澄んでくる  
勇みの心が湧いてくる  
「元の理」を解きほぐす実践教理書

養徳社 よもやま話

○月○日 編集部員が七年ほど取材で使用してきたボイスレコーダが壊れたと言ってきた。スイッチを入れたが無反応。「電池は新しいですか？」「当然、新しい」と両目に力こぶを作り、胸を張る。私も電池を見たら綺麗で新しいものと確信した。

経理の上司に価格表を見せ新しいボイスレコーダの購入を勧めると、「電池を買ってきてもう一度確認！」という。半信半疑で電池を購入。スイッチを入るとピッ！と音を立て動いた。代々無駄遣いを許さぬ経理の血？の賜物か。編集部員は「えっ？ 何度も確認……」と眩しながら肩を落とす。ふふふ、誰も早めのボケが始まったとは思いませんからネ、先輩！

【青山文治画伯85歳作品展】  
平成24年3月25日（日）～27日（火）  
天理本通り「ギャラリーおやさと」  
主催・養徳社